

演 題 名：豚の肝臓病変の一症例

発表者氏名：中山智之 山田 悟

発表者所属：滋賀県食肉衛生検査所

## 1．はじめに

と畜検査において病変を認めた、豚の肝臓について報告する。

## 2．動物名

豚（県内産）、品種：LWD、性別：牝、月齢：6ヶ月齢、  
と畜日：平成24年（2012年）6月4日。

## 3．生体所見

一般畜として搬入され、特に異常は認めなかった。

## 4．剖検所見

肝臓に下記肉眼所見の病変を、また肺炎と血液吸入肺を認め、肝臓と肺を全部廃棄措置とした。その他の臓器等は、特に病変を認めなかった。

## 5．肉眼所見

肝臓は全体的に横隔面、臓側面とも、赤色斑と淡褐色斑が密発していた。斑紋は、肝小葉単位のもの、肝小葉数個が合わさったものなど、ケシ粒大、粟粒大、米粒大と様々であった。割面は平滑で、表面同様、赤色斑、淡褐色斑が密発していた。

## 6．組織所見

HE染色を行い、肝小葉間組織の軽度の結合織増生および肝小葉単位での肝小葉辺縁肝細胞の異型化、縮小、暗色の色素沈着、および肝細胞の腫脹、類洞の狭窄、小葉間組織へのリンパ球の浸潤、小葉間静脈の炎症を認めた。肝細胞に沈着した暗色色素の判別のためフォンタナ・マッソン法およびホール法を行ったところ、いずれも染色されなかったため、これは色素沈着ではなく凝集と判断した。

## 7．考察

肝小葉間組織の結合織病変は、「軽度の結合織増生」と判断した。肉眼所見で認めた肝臓に密発した斑紋は、当初巣状壊死を疑ったが、組織所見で肝細胞が異型化、縮小、凝集し、細胞の構造を失いもろく固まっている状態を認めたことから、巣状壊死ではなく凝固壊死、薬物中毒、ウイルス感染を疑った。その上で、剖検所見で肝臓と肺以外の臓器に病変を認めなかったことから、薬物中毒、ウイルス感染を否定し「凝固壊死」と判断した。肝細胞の腫脹、類洞の狭窄、小葉間組織へのリンパ球の浸潤および小葉間静脈炎については、「慢性非化膿性炎症」と判断した。

## 8．診断

上記考察に基づき、本症例を次の通り診断した。

診断名：小葉周辺性壊死とそれに伴う結合織増生を主徴とする、肝臓の部分的な慢性非化膿性炎症